

「挟間町の沿革と

農業水路の偉人・工藤三助のこと」

牧 達夫

一、挟間町の沿革(要約)

挟間町は平成十七年十月、庄内町、湯布院町と合併し、由布市となった。

奈良・平安時代、大分川流域の庄内、挟間は阿南郷とよばれ、阿蘇野地区を除く庄内町、挟間町と大分市の賀来地区までが郷域であった。

阿南の地名語源は、アナ(穴)ミ(処・辺)と考えられる。アナは三方が崖や丘陵で囲まれている奥深い処、穴状に入り込んでいるような土地。ミは場所を示す接尾語とみる。ちなみに、ハサマ地名は、一般的には谷あい、物と物との間、挟まれた所、のことであろうが、阿南郷の挟間地名は大分川と由布川に挟まれている処、というのが地名の語源と考えられる。平安中期、後に豊後武士団を形成した大神一族の阿南氏が、在地領主として郷一帯を支配していたと思われる。大神氏の祖は大神惟基といわれ、その子供たちが阿南氏、植田氏、大野氏、白杵氏、高知尾氏に分かれ、さらに裔孫が佐伯氏、緒方氏、戸次氏、朽網氏、賀来氏などに分族したとされている。(大神氏系図) 大神氏の出自については諸説あるが、宇佐八幡宮(豊前国)の大宮司職を競った大神氏の一部の人たちが宇佐宮を出て、豊後国内の宇佐荘園に土着したり、国府の官人や郡司、郷司、荘司と

なって勢力を上げ、土地の開拓と八幡信仰、石仏文化を豊後に扶植したとする説を首肯したい。有名な白杵石仏をはじめ大分県の中南部にある石仏群は、この大神系の一族が関与したといわれている。

さて、平安末期の承安年間(一一七一―七五)に阿南郷内から由原(杵原)八幡宮の荘園、賀来荘が成立したといわれる。

賀来荘は郷内の賀来、中尾、宮苑、高崎地区と、種田郷だった小野鶴、笠和郷の八幡、生石まで及んでいた。弘安図田帳では庄三三〇町、本庄二〇〇町、平丸名三〇町が御用田、領家が一条家、地頭は大神氏系佐伯氏の賀来五郎惟永となっている。

鎌倉時代の天福元年(一一三三)、賀来荘を除く阿南郷も、「阿南荘」として荘園化した。もともと阿南郷は平安時代から由原八幡宮への寄進地も多かったといわれ、荘の領家は一条家であるが、実質的には由原宮の荘園であった。この時代から江戸時代も、そして今日まで由原神事を旧郷の人たちが務めているのは、この時からのえにしよう。

弘安図田帳では、阿南庄八〇町、領家室大納言、地頭は挟間尼公生蓮孫忠用鬼丸今又四郎直親となっている。尼公生蓮は挟間氏初代の挟間直重の生母、直重は大友二代親秀の第四子である。阿南庄内には多くの「名」が分布し、挟間は由原宮領阿南庄松富名に属してここに荘政所が置かれた。なお、内成地区は往時、笠和郷に属していた。「松富名」は中分されていて、北側は大友総領家領、南側が挟間氏の所領であった。

文治元年(一一八五)、源平合戦で源義経は屋島、壇ノ浦に平氏を

討ち、平氏は滅亡する。兄の頼朝は鎌倉に武家政権を樹立し、諸国に守護、地頭を置いた。

頼朝は、仲違いた功労者の弟義経を追放し、義経に加担した豊後武士団の頭領、大神一族の緒方三郎惟栄らを上州沼田荘に流罪とした。さらに頼朝は豊後国を知行地の関東御分国とし、のち頼朝の側近で「無双の寵児」（吾妻鏡）とまでいわれた大友能直を豊後国の守護職に任じる。このことから今日でも、能直を頼朝の落とし胤とする説を唱える史家もいる。

大友能直の出自は、相模国大友郷（現在の神奈川県小田原市大友町）で、前述のごとく頼朝の秘書官的立場にあり、豊後国への入国はなかったとされている。大友氏二代親秀も父能直とほぼ同じ立場にあり、やはり豊後国には入国していないようである。豊後に入国したのは、二代親秀の長子頼泰からといわれる。頼泰は蒙古軍襲来時、鎮西東方奉行（現地最高指揮官）として活躍した武将である。

この前後、初代能直、二代親秀の子らが相次いで豊後に入国し、その領有地から託間、帯刀、一萬田・志賀・田原（初代の子）、戸次・野津原・挟間・野津・木付・田北（二代の子）らを名乗り、所領地を治め、大友惣領家を支えていった。大友一族は先に述べた大神一族を大友化し、その土地で勢力を揚げ、豊後を大友王国に築き上げたのであった。

挟間氏は大友氏二代親秀の四子直重が祖で、挟間を本拠として挟間氏を名乗り、蒙古合戦に活躍した武将であった。

大友氏は幾多の苦難を乗り越えて、鎌倉・南北朝・室町・戦国期

と永い間豊後を治め、二十一代宗麟の時代には九州六か国を領する九州一の戦国武将となる。だが、天正七年（一五七八）の日向遠征における島津軍との合戦に大敗して以降、大友氏の権勢は凋落の一端をたどった。その後天正十四年（一五八六）の島津軍による豊後および大友領国への全面攻撃により衰退し、九州征圧に乗り込んだ秀吉によって大友氏は辛うじて豊後一国だけは領国として許されたのであった。

しかしそれもつかの間、宗麟の子義統（二十二代）は文禄二年（一五九三）の朝鮮の役での失策により、秀吉から豊後国を没収され、四〇〇年もの永きにわたった大友氏の豊後国統治は終焉を迎えた。

大友一族として惣領家を支え続けた挟間氏はこれより前の天正十六年（一五八八）、島津軍との戦での不始末という名目で、大友義統から討伐の命が下され、当主挟間鎮秀は由布院衆によって討たれ無念の最期をとげた。

今、挟間町龍祥寺近くの墓地に、挟間氏歴代武将らの五輪塔が佇んでおり、挟間氏の歴史をいまに伝えている。

秀吉によって豊後国は小藩に分立されたが、一六〇〇年の関が原合戦後の徳川政権により八藩、三他国大名領、天領とさらに細分化され、所領は入り交り、しかも改易、転封は激しいものであった。

このように国内で類をみない小藩分割という風景を豊後に課したのは、何故にあるのか。

秀吉や家康が考えたことは、大友氏が四〇〇年も治めた豊後国から大友氏の影を消し去り、分断により豊後国内に内部牽制を敷いた

ものであろうか。また、藩政を進めるに当って、大友氏の残存勢力を懐柔して庄屋などの地位につけ、不安が広がっていたであろう農村地域の治世に配慮したことも、徳川政権の巧妙な指示政策の一つであろう。このことは、先に述べた大友氏の影を消すこととは、矛盾するものではない。

ともあれ、挟間地域も府内藩、臼杵藩領、肥後藩領とに分割された。ちなみに庄内地域は府内藩、延岡藩領、肥後藩領、天領に、由布院は天領と延岡藩領に各々分割された。また現大分市においても、府内藩、臼杵藩領、延岡藩領、岡藩領、肥後藩領、天領に細分化された。

府内藩は一町三郷制を敷き、町は府内城下とし、里郷として城下に近い古国府組、上村組、賀来組、下郡・羽田組に、中郷として挟間一帯の来鉢組、内成組、下市組に、奥郷として庄内一帯の武宮組、橋爪組、野畑組に各々郷を分けて管理した。

小藩分立といえば、その後の大分県人質の形成に強く影響を残したと巷間よくいわれているが、確かに今日においてもその名残はなはいとはいえない。しかし、小藩分立だったからこそというのは、少し云い過ぎかもしれないが、二豊(大分県)では、藩校よりも私塾による学問世界の広がり強調したい。いってみれば、三浦梅園から脇蘭室、帆足万里、広瀬淡窓、福沢諭吉につながる二豊の学問系譜である。江戸期から明治初期にわが国でこれだけの著名な学者を輩出したのは、大分県の特質といえる。

大分県内には前記の有名塾だけでなく、各地に寺子屋、私塾が開

かれ、一般庶民がそこで学んだ。

さて、小藩分立による地域における領民の日々の営みは、どのような影響を受けたのであろうか。挟間に例をとると、三つの藩領に分割され、領民はさぞ戸惑ったにちがいない。親戚や知人間で藩が異なるケースが当然派生したであろう。

今日の社会とちがい徳川時代であり、領民の日常生活、藩間の行き来、祭りへの参加、冠婚葬祭等々には、何らかの規制というか、藩と藩の間でのそれなりの取り決め、約束ごとがつくられたであろう。実際には、領民から不平、不満が出ないよう、庄屋間で話し合いが持たれたと思える。

しかし、二七〇年続いた徳川政権はゆらぎをみせはじめ、藩政もゆきづまって百姓一揆も多発するようになり、ついに一八六八年、明治新政府が発足する。世にいう明治維新である。挟間は明治四年の廢藩置県により、いまの大字単位に村が生まれ、明治二十二年の町村制施行により、挟間町の元(母体)である挟間村、石城川村、由布川村、谷村が誕生する。

その後昭和二十九年、町村合併促進法により、前記の四村が合併し、新しい挟間村が発足し、翌年の三〇年四月一日、町制施行により挟間町となる。その後、机張原地区、東院、宮苑が大分市に編入、内成が別府市に編入された。次に大分市の鬼崎地区の一部が挟間町に編入される。そして平成十七年十月、挟間町、庄内町、湯布院町が合併して由布市が発足する。

今後の挟間町や由布市の発展には、観光・文化・環境都市を目ざ

す行政や政治家、そして何よりも市民ひとりひとりの意識改革、自己改革にある、と私は思っている。

二、農業水路の偉人・工藤三助のこと

(一) 工藤三助(谷村)の野津原三渠の碑と勝海舟・坂本龍馬

私が工藤三助なる人物を識ったのは、ほんの七、八年前のことである。その頃私は坂本龍馬のことを学習する傍ら、高知、長崎、京都、山口、霧島温泉など龍馬ゆかりの地を訪ねていた。さらに龍馬の師である勝海舟のことや海舟日記を読む必要を感じていた。

ちょうどそんな折、私の歴史の師である加藤貞弘先生から、勝海舟と坂本龍馬が幕末、大阪から佐賀関に上陸し、豊後道(肥後道)を通り熊本、島原経由で目的地長崎に赴き、復路も同じ道を歩き、久住、野津原、鶴崎、佐賀関に立ち寄り大阪に帰った事実を知らされた。

私はその事実を知らず、驚きとともに「海舟日記」を読むべく図書館に走った。日記には「文久四年(一八六四年)二月十五日、豊後佐賀関着船。徳応寺へ止宿。龍馬子同行。十六日、豊後鶴崎の本陣へ宿す。(以下略)。十七日、野津原に宿す。(以下略)。十八日、野津原の宿より出ずれば、山路。この道、久住山を左に見る。往時、この宿の村長三輔なる者、山中より水源を引き、三渠を引く。これより古田二十余町、新田三十余町を得たりと、その事実を記す碑あり。七里、久住に宿る。」とある。

私は、これによつてはじめて三渠を引いた工藤三助のことを知っ

た。私はこのあと、友人らと野津原湛水にある三助の「三渠の碑」を訪ねた。七年前のことである。碑は湛水の山際にいまも残る旧街道添いに建っている堂々とした碑である。三助の死後一〇〇年の安政六年(一八五九年)、三助の偉業を讃えて建立された。

維新の傑物、海舟、龍馬がこの道を歩いて碑を訪ねた時は、建立して間もない五年後のことで、三助の偉業に感銘を受け、日記に記したにちがいない。海舟が龍馬との二ヶ月に及ぶ旅において、このような記述は他にはほとんど見当たらない。

碑を読んだ二人の会話はどんなものであつたであろうか。海舟「龍馬よ、この田舎にも実のある偉い男がいたんだなあ!」「先生、百姓は水が命やに、大きな助けになり申したろう、まっこと偉いもんじゃない」と龍馬。また海舟「日本の夜明けは近い、急ごう龍馬よ」と、私は想像してみた。

ところで、この時の海舟、龍馬の旅の目的は、長州を砲撃すべく長崎に集結していた四国艦隊との交渉(海舟への幕命)にあつた。が海舟には密かな大仕事があつたと思える。海舟はこの長い旅で、龍馬を大きく飛躍させようと心を砕いていたにちがいない。それにはいっしょに旅を重ねることが一番だった。旅道中で語り合い、熊本の横井小楠の許に送り学ばせ、長崎の町を見せることにあつたと思ふ。

まさに風雲急を告げる時代。龍馬が幕末の表舞台に躍り出るのも、この道中直後からである。海舟による薫陶と、これに応えた龍馬の感性と勇氣に依るものであろう。一八六四年の豊後道の旅路は、ま

さに「日本の新しい夜明け」への旅であり、こののち時代は大きなうねりとなって維新へと動いていった。

これまで司馬遼太郎をはじめ多くの作家、史家が、この二ヶ月に及ぶ運命的ともいえる海舟、龍馬の旅を、ほとんど描いていないのは誠に残念としか云いようがない。今後、この旅路の意義について検証、言及する史家、作家の出現に期待するものである。そして海舟日記に出てくる谷村出身の工藤三助を、挟間町はもちろん広く大分県内に知らせる動きも必要ではないだろうか。

(二)工藤三助と開発した三渠

三渠については、私はまだ二回程度部分的しか訪れていないので詳しいことはわからない。今後水源を含めて井路をゆっくり訪ね、機会があれば感想文を記述したい。したがって今回は大分県の資料を参考に簡単に紹介したい。

「大竜井路」

大竜井路は、元禄十一年～元禄十二年(一六九八年～一六九九年)、三助が三十八歳から三十九歳にかけて拓いた井路である。水源は庄内の野畑熊群山南麓の溪流で、取入口の岩に元禄十一年の文字が刻まれている。

三助は出身の谷村まで拓こうと考えたが、水量が少なく、思いは達成できなかったといわれている。

「鑰小野井路」(現世利川井路の一部)

鑰小野井路は、元禄十六年～寛永四年(一七〇三年～一七〇七年)、三助四十三歳から四十七歳の時、難工事の末拓いた水路である。西福寺に難工事の完成して三助が彫らせた不動明王像が安置されている。

「提子井路」

提子井路は、三助が六十四歳の享保九年(一七二四年)、野津原手永栗灰村の提子淵の滝上に井路を計画、着工する。しかし、肥後藩はこの年大凶作となり、工事は中止となり、以降、三助生存中は工事を着工することができなかったという。寛曆八年(一七五八年)、三助が九十八歳で亡くなるが、それから十五年後の安永二年(一七七三年)、三助の思いを継いだ阿鉢の佐藤夫四郎、佐藤清兵衛、三助の曾孫、辨助らによってやっと工事が再開され、安永五年(一七七六年)に完成した。この水路により谷村全体に水が通水されるようになる。

提子井路の一番奥に「提子井路の碑」がある。三助の意志を継いだ一人、佐藤清兵衛の、第五代、元代議士の佐藤庫喜氏が建立した。三助廟が谷小学校東にあり、小学校校庭に頌徳碑が建っている。

谷村出身の工藤三助は、若い時分から聡明で、数理の学を究めていたといわれる。三助は生涯を通じて水路事業等地域の開発に尽力した人物だった。江戸時代はいくつもの藩に分かれていたので、水路の開発時での各藩との接衝も大変苦労したことと思われる。

毎年、水恩祭が催され、野津原、庄内、挟間に広がる三助の拓いた水と三助の遺徳に感謝を捧げている。三助はこの三渠の他にも、藩命による肥後国水俣村の水路開削、小国郷治水事業に尽力、また享保十年（一七二五年）の湯平村山津波復旧工事に伴う湯平温泉の石畳を完成させている。

郷土の大恩人である工藤三助を、地域を挙げてこれからも敬愛して語り継いでゆかれることを期待したい。（文中、挟間氏は狭間氏と同義であるが、ここでは筆者の原文をそのまま使用している。）